

日生藻場造成推進協議会の取り組みについて



『アマモ場保全を通じて、
持続可能な里海づくりを』

日生藻場造成推進協議会

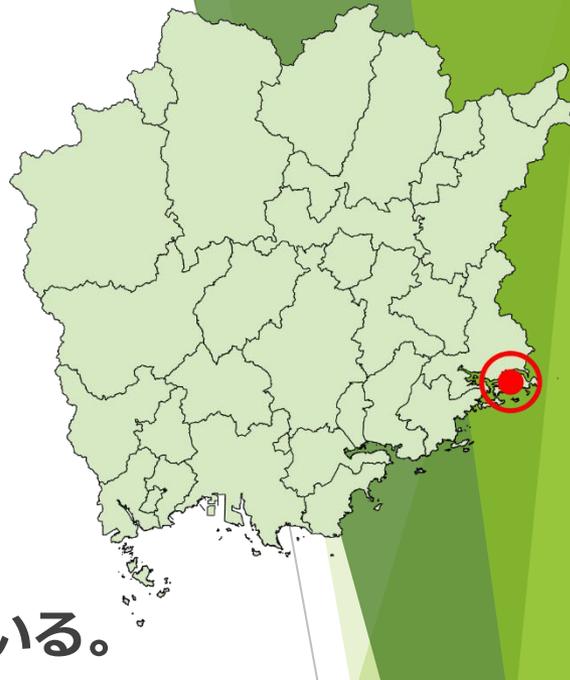
目次

1. 日生地区について
2. アマモ場保全活動の背景
3. 組織の設立
4. アマモ場の保全活動について
 - ①花枝の採取
 - ②花枝の保管
 - ③種の選別と播種
 - ④サポーターの協力
5. 活動の効果と今後の方針
6. さいごに ～アイゴとのかかわり～

1. 日生地区について

- ・ 岡山県の南東部、兵庫県との県境に位置する。
- ・ 本土と大小約13の島からなる
日生諸島で構成される。
- ・ 昔から「日生千軒漁師町」と呼ばれる漁業の町。
- ・ 中でもカキ養殖業は岡山県下で最大。

「日生かき」の産地として全国的にも知られている。



日生諸島



ご当地お好み焼き
カキオコ



日生かき

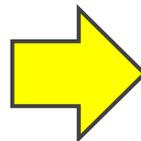


日生町漁協の魚市場
「五味の市」

※写真は日生町漁協HPより

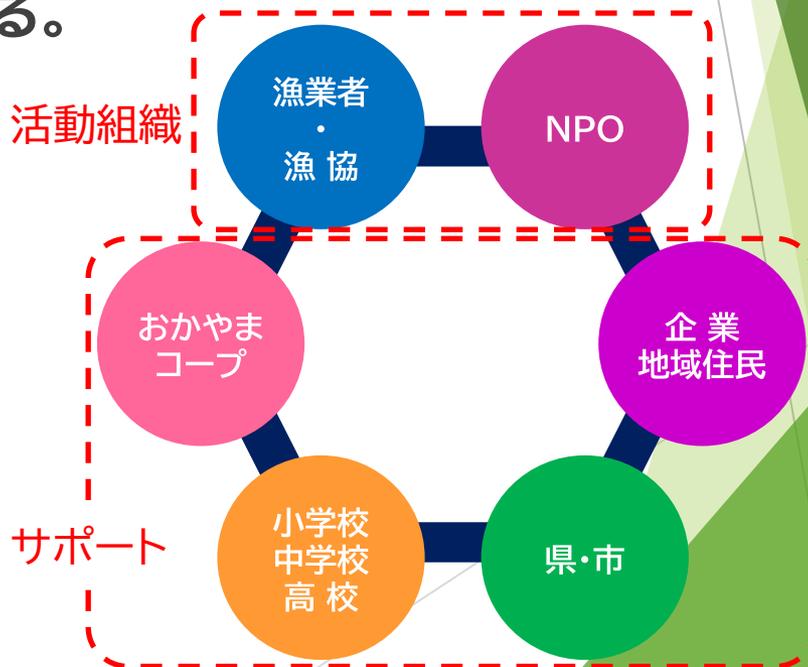
2.アマモ場保全活動の背景

- ・かつて、日生地区には大規模なアマモ場が広がっており、航行の妨げになり邪魔物扱いされることもあった。
- ・しかし、1985年、沿岸で壺網（小型定置網）を営む漁業者が、漁業不振の原因を考えたところ、アマモが海岸から姿を消していた。
- ・岡山県が調べたところ、日生諸島最大である鹿久居島の周辺が過去にアマモ場の大繁茂地であったが、アマモ場は大きく減少していた。



3.組織の設立

- ・ アマモ場の減少に危機感を募らせた壺網の漁業者を中心に、漁協青年部員も参加して、1985年度から保全活動を開始した。
- ・ 壺網漁業者の減少に伴い、2009年より「**日生藻場造成推進協議会**」を設立し、漁業者とその後継者を中心に現在まで活動を行っている。
- ・ 組織の体制は、「漁業者」を主体に、「漁協」「NPO法人(里海づくり研究会議)」から構成している。
- ・ そのほかにも、県や市、おかやまコープ、地元の小中学校などを中心に、多様なグループのサポートを得て活動を進めている。



4.アマモ場の保全活動について

【活動の基本方針】

- ・活動の基本方針は、アマモの種を効果的に確保し、その播種により藻場の回復を図ることである。

①花枝の採取

アマモの種を確保するため、5～6月頃にアマモの花枝を採取する。

②花枝の保管

播種の時期までアマモの種を保管するため、花枝を保管袋に吊るす。

③種の選別と播種

9～10月頃に保管していた花枝を回収し、比重選別した種を播種する。

4.アマモ場の保全活動について

①花枝の採取

- ・アマモの種を確保するために、花枝を採取。
- ・活動初期は、海底から伸びている花枝をフックや手で掴んで採取していた。
- ・活動を続けていると徐々にアマモ場が再生してきた。
- ・しかし、アマモ場の再生のともない



問題発生!!

問題点

- ・アマモ繁茂期に花枝を含んだ流れ藻が漂流
- ・増えた流れ藻が航行の妨げになる
- ・漂着した流れ藻が腐り異臭を放つ



何かしら対策が必要！



4.アマモ場の保全活動について

①花枝の採取

- ・「花枝の採取」と「流れ藻の問題解決」ができる方法として、2013年からは、流れ藻の花枝から種を採取する取組を開始。
- ・5月下旬～6月上旬ころに、3～4回程度実施。
- ・港内をはじめ、筏や壺網の周辺など、漂流する流れ藻を船上から採取している。



4.アマモ場の保全活動について

②花枝の保管

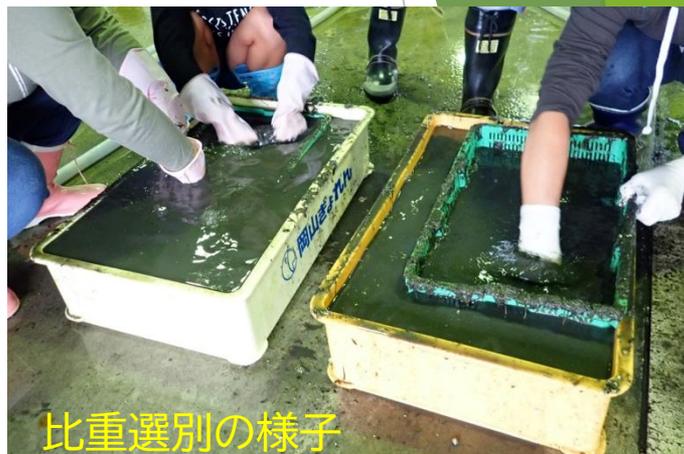
- ・採取した流れ藻（花枝）は、網袋に詰めて、播種の時期まで筏に吊るして保管している。
- ・保管している間に種以外の部分は枯死・分解される。



4.アマモ場の保全活動について

③種の選別と播種

- ・ 9月下旬～10月上旬ころに、保管していた花枝の袋を引き揚げ、「種の選別」と「播種」を行う。
- ・ 袋の中は枯死・分解されたアマモがヘドロ状になっているため、海水をためた容器内で洗い流し、海水中に沈んだ良質な種のみを選別する（比重選別）。
- ・ 選別した種は、そのままの状態での手で播種する。
- ・ 播種する種の量は、毎年**200～300万粒**程度であり、種が多い年には**450万粒**ほどを播種している。



4.アマモ場の保全活動について

④サポーターの協力

- ・当組織の特徴として、保全活動を多用なグループのサポートを得ながら実施していることが挙げられる。
- ・主力のサポーターは「**おかやまコープ**」や「**日生中学校**」
- ・おかやまコープは、2012年に県、漁協、NPO法人の4者で「アマモ場造成活動に関わる協定」を結び、協力体制をとるようになった。
- ・日生中学校は、漁協とカキ養殖の体験学習を行っていたこともあり、流れ藻採取を開始したタイミングで、協力を得られるようになった。
- ・花枝採取～播種まで一連の作業に参加しており、**多い時には100人規模での作業**となっている。

4.アマモ場の保全活動について

④サポーターの協力

- ・サポートが得られる事で、「**作業人員の確保**」ができるとともに、活動を通じて「**アマモ場保全活動の理解増進**」につながっている。
- ・活動実施にあわせて、里海体験（カキの養殖体験や生き物観察）を実施しており、里海や海のことを知るための「**教育・学習活動の場**」としても機能している。

協力体制のメリット

作業人員
の確保

参加者の
理解増進

教育・学習
活動の場

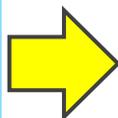


里海体験（生き物観察）

5.活動の効果 と 今後の方針

①アマモ場の再生 ～継続は力なり～

- ・活動当初は「お金にもならないのに何になるのか」と他の漁業者から非難されることもあったが、毎年コツコツと活動を続けてきたところ、徐々に成果が見えてきた。
- ・特に、底質改良剤としてカキ殻を利用したところ、2008年頃より効果が現れてきた。
- ・活動開始から30年が経過する2015年には、**250ha**までアマモ場が回復し、現在も同程度でアマモ場を維持し続けている。



5.活動の効果 と 今後の方針

②保全活動の波及 ～続ければ仲間が増える～

- ・ アマモ場保全活動を行っていたこともあり、2016年には日生町で「**全国アマモサミット 2016 in 備前**」が開催され、約2,000人が全国から集まった。
- ・ これを機に活動の輪がさらに広がり、地元の小学校や高校、企業などがアマモ場の保全活動に参加するようになった。
- ・ 最近では、県外にまで当組織の活動が知られるようになり、県外の中学校が修学旅行を兼ねてアマモ場の保全活動に参加する機会も生まれている。



5.活動の効果 と 今後の方針

②保全活動の波及 ～続ければ仲間が増える～

- ・ 1985年から開始したアマモ場の保全活動は、今年度で**継続40年**を迎えた。
- ・ これまで、おかやまコープや日生中学校をはじめとして、非常に多くの参加者を得ることができた。
- ・ 2014年以降（コロナ禍を除く）、多い年には年間の参加延べ人数は700人を超え、非構成員は500人以上が参加していた。
- ・ アマモ場の回復だけでなく、**多くの団体や学生が活動に賛同して参加してくれるようになったことは、大きな成果の一つである。**

アマモ場保全活動の参加延べ人数



5.活動の効果 と 今後の方針

③今後の方針

- ・ 日生町地先のアマモ場面積が250haにまで回復し、維持し続けていることは、アマモ場の保全活動を40年続けてきた成果である。
- ・ これからもアマモ場を維持・回復するためには、引き続き取組を進める必要がある。
- ・ また、アマモ場を再生することを目的に始まった活動だが、活動の参加者が増えた現在、人の手を加えることで多様な生態系が維持される「里海」の大切さを伝えることも目的の一つとなっている。
- ・ 今後もアマモ場の保全活動を通して、里海の考えを次世代へつなげるための取組を継続していきたい。



アマモポットを作成する小学生

6.さいごに ～アイゴとのかかわり～

- ・近年、藻場の取組の話となると、よく問題となるのが「植食性魚類による食害」である。海水温上昇などの気候変動の影響によるものだろうが、瀬戸内海では「**アイゴ**」による被害をよく耳にする。
- ・一般的にはアイゴの出現は嫌がられるものだが、日生町においてはアマモの再生によって「**アイゴが戻ってきた**」と**喜ぶ人も多い**。
- ・日生町にはもともとアイゴを好んで食べる文化があり、アマモが増えることで、アイゴが増え、漁業者が漁獲してきた。
- ・アイゴを漁獲することで、藻場の維持にどれだけ貢献してきたかは定かではないが、そのような食文化を通じて、知らず知らずのうちに「里海」の取組に通じていたのかもしれない。

ご清聴ありがとうございました

